

あの日の頃 - 14

西村和之

毎年発行される「同窓会報」を拝見し、同窓生と学校との結び付きの深さを感じたり、目黒星美の歴史に触れたりすることができ、楽しく読ませてもらっていた。

今回、同窓会の幹事の方から原稿依頼を受けたとき、まさか自分が書くことになるとは思っていませんでした。まだ自分よりも先輩の先生がたくさんいらっしゃると思っていたが、次は私とのこと。いつまでも若いと思っていたが、考えてみると、目黒星美に勤めてもう十四年目。

勤め始めたころ小学生だった新任の先生と一緒に仕事したり新任当時、受け持った子供達が、今年で大学を卒業すると思うと改めて、「光陰矢のごとし」と感じる。

この十四年を振り返ってみると、様々な思いがよみがえってくる。特に思い出されるのが新任のころ、初めて送り出した卒業生、小学校生活の三分の二を担任した子供達のことである。

初めて担任したのは、三年の男子クラスであった。(その頃は、まだ男女別クラス編成であった。)希望に燃え、子供達の中に飛び込んでいったのだが今考えてみると、子供の気持ちをしっかりと把握できず、悩みながらの一年間であった。

その時、一緒に組んでいたのが富田先生で、何かあれば快く相談にのってくださったり、励ましてくださったりした。また、他の先生方からもアドバイスをいただきながら、児童理解に努めた。それから六年後、初めて五年生の男子を担任した。後にも先にも考えられないことだが、二十名のクラスであった。男子の場合、中学受験という大きな試練を乗り越えていかねばならない。その大切な時期を私が受け持つことになり、卒業生を送り出せる喜びと不安が交錯していた。しかし、子供達は、兄弟のように仲が良く、また、保護者の方々も協力して下さり、苦しさよりも楽しい二年間であった。

その子供達も昨年、高校を卒業。昨年の春、クラス会を行った。約半分(といっても十数名であるが)集まり、大人びた顔つきで、しっかりした考えを持っていることにたのしみを感じた。また、時々電話をくれたり、遊びに来たり、今でも目黒星美に愛着を持っていることに教師としての喜びを感じる。

昨年送り出した子供達との付き合いは長い。二・四・五・六年と四年間担任した。子供達には、持ち上がるたびに、「また西村先生か。」と新鮮さがなかったようであるが.....。

この子供達は、何か行事があるとよく雨に降られた。二年生の遠足で「子どもの国」へ行った。着くまでは曇り空であったが、歩き出すと雨が降り始め、本降りになってきた。それでもせっかく来たのだからと雨ぐを着て回ったのだが、どろんこになったり、びしょぬれになったり、子供達は苦労していた。きっと今でもあの遠足のことは覚えているだろう。また、「いもほり」にも雨のため行けなか

った。

五年生の合宿では、キャンプファイヤーが雨のため中止。六年生の合宿でやることになったのだが、また雨になってしまった。結局、室内で、大森先生のすばらしいアイデアにより、こたつを裏返して飾り付け、ファイヤーにみたてて行った。とかく雨にたたられた学年である。

一説には、私が「雨男」と呼ばれているが.....。

私事であるが、六年生の夏に二世が誕生した。そのことを皆に話すと一緒に喜んでくれた。会うたびに、「一紗ちゃんは元気。」と声をかけてくれる。その中の一人が生まれてくる我子に手紙を書いてくれた。その手紙がコンクールで入賞した。我家の宝物として大切にしまっている。娘が大きくなったら、読ませ、「お父さんは、皆に慕われていたのだぞ。」と話すつもりである。

この子達と過ごした四年間もさまざまな思い出とともに楽しい四年間であった。最初に送り出した子供達のようにいつまでも付き合っていけたらと思っている。

今年は、一年生を担当している。六年生から一気に一年生に下りたので、初めは、ギャップを感じたが今では、四十一名のお父さんになったような気持ちで、日々過ごしている。子供達から、「学校大好き。」「先生大好き。」と言われると、思わずほほがゆるんでくる。

毎年、子供達は変わっていくが、目黒星美の子供達の「豊かな心」はいつまでも変わらない。

我々教師もドン・ボスコのように子供達と接し、子供達の成長の手助けができればと思っている。

【同窓会報、第14号・平成7年1月1日発行・から転載】